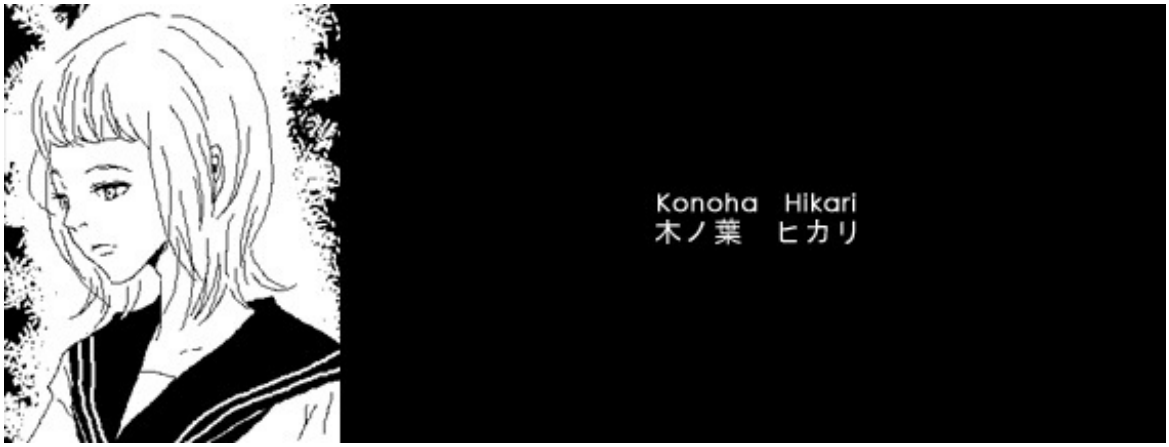
月のヒカリ

V

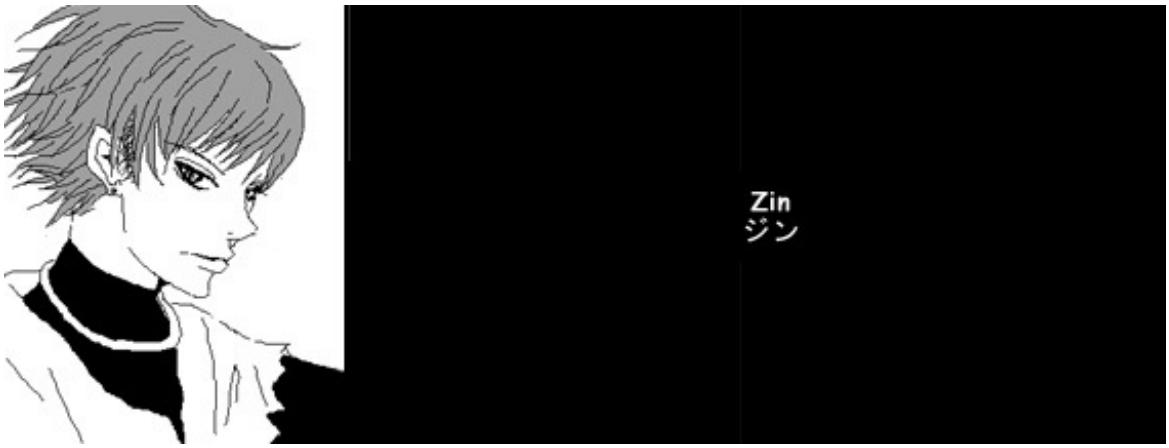
著：モカ
絵：Nanaha

月のヒカリ　登場人物



高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。
2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカリは家族に馴染めずいつも孤独を感じている。
学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブンズドアに迷い込む。

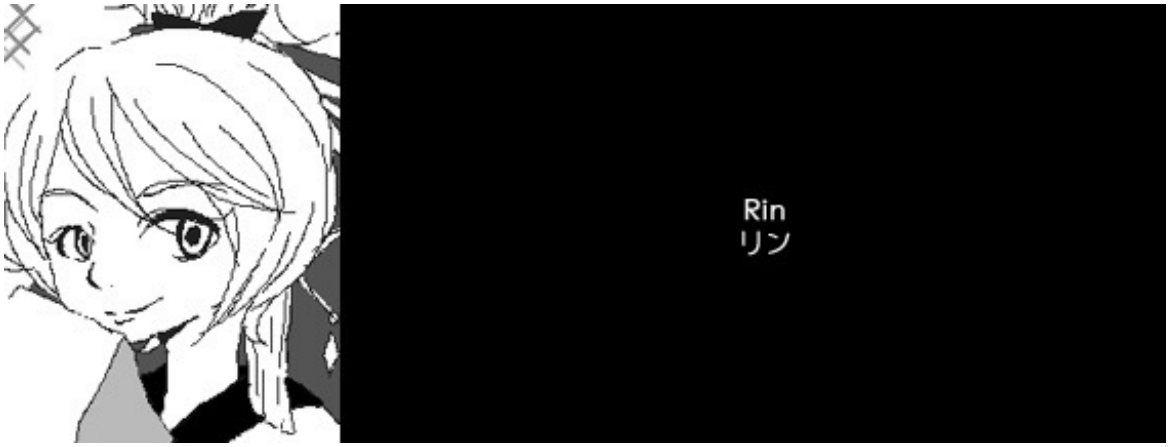
髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。
闇を抑える不思議な力を持っている。
ヒカリの前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視しする城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカリに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。

狼家の当主で、面倒見のいいお兄さん的存在、月下を主としたいいつも影ながら見守っている。武に長けていていて国の警護を任されている。



城でのヒカリの教育係。
小柄で一見少女のようだが本人が言うには大人のレディだそうだ、チョロチョロ動く姿はハムスターのようで可愛いい。性格も明るくヒカリの面倒を面倒くさがらずみてくれる。

若くして上官に上り詰めた天才。

頭脳もずば抜けていいが剣の腕も立つ城の女性の憧れの君。背が高くガッチリしていて綺麗な顔立ちの男性で、軍人でありながら物腰は軟らかで堅苦くない。

素直になれなくて・・・

翌朝、ヒカリは居間で大河や綾女と朝食をとる。
「本当！ジンのやつ何処いったのかしら出掛けるなら出掛けると言って行ってほしいわ！朝ごはん作っちゃったじゃない」
と綾女は怒りながらご飯を口にかきこむ。
「まぁまぁ、そんな食い方したら喉に詰めるぞ綾女」
と大河が宥めるが綾女は聞いていない。
ジンは、夜の間に狼家を後にしたらしく朝には部屋にジンの姿は無かった。皆に挨拶もせず行ってしまったらしい、ジンらしいとヒカリは思った。月下もまだ部屋から顔を出さない、ヒカリは気になりつつも黙って食事をとる。そんなヒカリを見て大河は首を傾げる。
「なぁヒカリ、昨日月下と何かあったのか？屋敷にはジンと戻ったみたいだが月下はどうした？」
ビクンとヒカリの体が月下と言う単語に反応する。その様子を見た大河は大間かな出来事のさっしがついた。

『あのムッツリスケベめヒカリを追い帰しやがったな！二人きりになれるチャンスを自分で無駄にし敵にくれてやるなんて何処までもバカな奴！何考えてるんだ ！！』

と大河は心の中で叫んだ。ヒカリは箸を置き落ち着いた口調で・・・
「昨日は、月下とは会えなかったのそれでジンが迎えに来てくれて・・・」
「そうか、ならいい！！」
と言い少し慌てながら大河が茶碗からご飯を口に運ぶ。ガタンと言う音と共にヒカリは席を立つ。
「ヒカリ、今日の予定は？」
と大河がヒカリに尋ねると。
「ちょっと中庭を散歩してくるね」
と言い残しヒカリは足早に居間を出て行く。

『どうしたものかこの空気！？』

大河は頭を抱える。狼家の食卓にはどんよりとした重い空気が漂っていた。

外はぽかぽか暖かく良い天気だった。中庭には池があり魚がいるらしく水面をゆらす、ヒカリは池を眺めていると少し心が落ち着く気がした。
「何してるんだろう私・・・」
昨日恋華が来ていたことをふと思い出す。恋華は城に戻れと言っていた。ヒカリは、狼家に自分の意思で残っているが月下が目を覚ました今ヒカリが狼家にいる意味は無くなっていた。

『でもまだ戻りたくない、こんな気持で戻れない』

ヒカリが、そんな事をぼんやり考えながら池を眺めていると池の向こうの廊下から月下が歩いてくる。
「月下！」
何故かヒカリは、とっさに近くに生えていた草影に隠れる。ヒカリは、少し考えた後。
「何隠れてるの私！私が隠れてること無いのよあっちが悪いんじゃない！」
と思い直し草影から出た時だった。
「月下〜〜！！」
と叫ぶ若い女性の声が聞こえて来た。
「何！？」
ヒカリは、目を疑った。月下に飛び付き首に手を回し抱き着く女性の姿に…月下も嫌がる様子は無い、それどころか腕を組み屋敷から二人で出て行ってしまう。ヒカリは、余りにも衝撃的な出来事に口をあんぐり開け呆然と立ち尽くす。
「なっなによ〜！！どう言うことあの子誰なの！？私、聞いて無いわよ！月下の馬鹿！！」
と怒りを表にする。
「ちょっと待って、何で私怒ってるの？だって私と月下は何でもないのよ月下が誰と付き合っていようと関係ないはず、それどころか昨日の夜喧嘩別れしたばかりなのに」
自分勝手な言い分だと思っていてもヒカリの怒りは治まらない。
「え〜い！どれもこれも月下が悪いのよ！！一言文句を言ってやらないと気が治まらないわ」
と言い捨てる月下達を追って走り出す。途中、フルーツが乗った皿を片手にヒカリの様子を見にきた大河とすれちがう。
「ヒカリ、何処に行くんだ！？」
と大河は横を走り去るヒカリに声を掛ける。
「月下に聞いて！」
「はぁ？まぁ月下と一緒ならいいのか？！」
とのん気に大河は首を傾げた。
ヒカリは月下達を追い市場まで来ていた。まだ朝早いと言うのに市場は人で賑わっている。月下と少女は楽しげに会話をしながら腕を組んで歩く。人を掻き分けヒカリは月下達を見失わないように必死に追い掛けるが、人混みのせいで少しずつ月下と距離が開いて行く。
「月下の馬鹿！私と話をする時はいつもニコリともしないくせに！！」
二人を見ていると自分が腹を立ているのが惨めに感じてくる。月下とヒカリの心の距離そのままにどんどん月下との距離は離れて行く、ヒカリの足取りはだんだん重くなりトボトボと力無く歩く。とうとう月下達の後ろ姿は見え無くなっていた。
「何してるんだろう私・・・」

『二人を追い掛けて何がしたかったの！？別に月下は悪い事してる訳じゃないただ私が認めたく無かっただけ、月下の隣に自分じゃない人がいることが・・・』

ヒカリは、胸が苦しくなり瞳から涙がこぼれ落ちる。フラフラと何度も人にぶつかりそうになりながら泣き顔を隠しつつ歩く。
「おい！ちょっとネーちゃん！」
誰がヒカリを呼び止めるが、ヒカリは」逆に振り払うように歩く速度を上げる。今は、誰とも関わりたくなかった泣き顔を観られるのも恥ずかしい。
「煩いわね！私今誰とも関わりたくないのほっといて！！」
「おい！前をみろよ！！」
かまわず誰かが叫ぶ。
「前って！？え～！！」
ヒカリの目の前に急に大きな水溜まりが現れる。何かに躓きそのまま水の中に・・・ヒカリの体は吸い込まれるようにバシャンと豪快な音を立てて水の中に落ちた。慌てて身をお越し水の中から顔を上げると同時に頭上からも大量の水がヒカリに襲いかかる。何とか水の流れから逃げだしたが出る気力がなくそのまま水の中に座りこんだ。
「なんだったの！？」
と言う問いに呆れた顔でヒカリを観ていた少年が
「だから言っただろ危ないって、あんたは広場の噴水に豪快に落ちたんだよ」
ヒカリは、辺りを見渡すと見覚えのある噴水の中に自分が座っていることを理解する。早く噴水から出ようと立ち上がろとした時だった。
「ネーちゃん服、服」
と少年が少し顔を赤くし視線を反らす。自分が着ているものに目をやるとユーリス独特の薄い淡い色の生地のせいで水に濡れた服は透けて肌が見えていた。慌ててヒカリは噴水の中に戻り小さく身をかがませる。
「嘘でしょ、これじゃ動けない」
そうこうしているうちに、野次馬達が噴水の周りを取り囲む。
「よーネーちゃん、水浴びかい！？」
などヤジをとばす者も現れる始末だ。どんどん状況は災厄な方に悪化していく。
「おい、見せ物じゃないぞ！」
少年が野次馬を追い払おうとするが効果は無かった。
「どうしたらいいの！？」
バシャンと音がした方に視線をやると男が噴水に入ってこようとしている。
「出れないならオレが手伝ってやるよ」
とニヤニヤしながらヒカリに近づいてきていた。
「イヤー結構です！！」
男がヒカリの腕を掴もうとした時だった。
「ヒカリ殿こんな所で何をされているのです！？この肌寒いのに水浴びですか？」

とすました顔をしヒカリを見据えている人物は関 琢磨だった。
「せ、関さん！？何故ここに！！」
ヒカリの一番今会いたくない人物ナンバー1の人物だった。やっと認めてめらえたのにこんな間抜けな格好を観られるなんてまた呆れられそうだ。でも、有難いことに琢磨を見た野次馬達は急に現れた大物オーラに驚き後退りする。琢磨は怯むことなく水の中に入りヒカリに上着を掛ける。
「立てますか？」
と手を差し出したその姿は正に王子様だった。

『眩しい！？』

ヒカリは少し戸惑いながらも琢磨の手を取った。そのまま琢磨はヒカリを抱き上げる
「うわー！？」
綺麗な琢磨の顔が思わず接近する。
「キャ～琢磨様！」
と言う女性の声が飛び交う。聞いてはいたがユーリスでの琢磨の人気は本物らしい。
「何あの子、琢磨様のなんなの！！」
とヒカリに対して不満の声も聞こえてくる。噴水から出ても琢磨はヒカリを下ろす様子がない。
「助けてくれてありがとう、もう下ろして頂いて大丈夫です。」
ヒカリは恐る恐る琢磨に尋ねるが・・・
「嫌だ」
と素っ気なく琢磨は言う冗談ではなさそうだ。
「えー！」
とヒカリはパニックになる。それでなくても目立っているのに早くこの状態からヒカリは解放されたかった。
「貴女はまだ自分の立場を分かっていない、あの場で貴女を城に連れ帰らなかったこと私はとても後悔している」
外見とは違い琢磨はとても真面目な人だった。ヒカリは何も反論出来ず黙り込む。琢磨は、ヒカリを抱き抱えたまま歩き出す野次馬達は二人に道を開ける。
「ちょっと！何処に行くきですか！？」
「決まっているだろ城だ、もう勝手は許すつもりはない」
「嫌！私まだ城には帰りたくない離して！」
とヒカリは抵抗するが効果は無い、余りにもヒカリが暴れるのを見かねて琢磨は・・・
「あまり暴れるとまた水に放り込むぞ！」
「それはちょっと！！」
琢磨ならやりかねないとヒカリは怯む。
「ねー月下、広場が騒がしくない？あれは琢磨様！？」
とナミは琢磨を見て興奮する。
「琢磨？何故あいつがこんな所に、ヒカリ！！」

月下は、琢磨の腕に抱かれたヒカリを見つけ目を疑った。
「何やってるんだあいつわ！」
「何、あの子知り合いなの！？ちょっと月下何処行くき！」
と走り出そとする月下の腕をナミは掴む。
「ナミ離せ！」
「何で月下が行かないといけないの？あの子誰なの？！」
「誰って！？」
と一瞬月下は立ち止まるが・・・
「仕方ないだろムカつくんだよ！」
と言い捨てると勢いよく琢磨の前に出て行き、行く手を阻む。
「ヒカリ何してる！！早くそいつから離れろ！」
「月下！」

『何で、月下がここに！！』

「離れろと言われても・・・」
ヒカリは琢磨に静止され身動きが出来ない状態だった。
「急に現れて面白い事を言ってくれるじゃないか黒龍」
周囲が黒龍と聞きざわめきたつ。
「ちょっと関さん！」
とヒカリは琢磨に抗議するが琢磨は無視する。
「お前がヒカリ殿を止める何の権利があると言うのだ？」
「煩い！俺はそいつの保護者だ！！誰にも文句を言われる筋合いは無い」
その言葉にヒカリが反応する。
「ふざけないで！誰が私の保護者ですって、行きましょう関さん」
とヒカリはさっきと真逆の事を言う。
「お前！嫌がっている様子だったから助けてやろうとしているんだろその態度はなんだ！」
「何よ急に現れて勝手なこと言わないでよ。自分は女の子とベタベタしていたくせに！？」
と今度は月下とヒカリが口論を繰り広げる。琢磨は、会話に入る事が出来ず呆然と立ち尽くす。
知らぬ間にヒカリは琢磨の腕から抜け出していた。
「お前だって昨日！」
「昨日て！？」
とヒカリは聞き返すが月下は口ごもる。そんな事をしているうちにどんどん野次馬が集まってきて、ヘンテコな3人の様子を興味津々にみな見物していた。騒ぎを聞き付けた警備の兵士がやってきて
「おいお前ら何をしている！！」
とヒカリ達の方へ近づいてくる。それを見た月下は、ヒカリの手を取り。

「行くぞヒカリ、兵士に捕まると厄介だ後は任せた！！」
と琢磨を置いて走り出す。
「月下！ちょっと離してよ！」
とヒカリが抵抗するが月下の力強い手を振りほどくことは出来ない。
「あっちだ！」
兵士達が追い掛けてくる。月下はとっさにヒカリを抱き寄せ物影に隠れると兵士達は気づかず行ってしまう。
「琢磨のやつ兵士を使って俺たちを捕まえる気だな」
ヒカリはというと月下の腕から逃れようと抵抗を続けていた。
「お前なぁ、少しは大人しくしてろ見つかるだろまたく何で琢磨となんかといたんだそれも・・・」
と月下がヒカリに振り返った瞬間少し顔を赤くし視線を反らす。もしやとヒカリは自分の服を見ると暴れたせいで上着が乱れ濡れた服から肌が透けて見えていた。ヒカリは上着を慌てて閉じると月下を睨む。
「良く見たらお前びしょ濡れじゃないか髪も」
と月下がヒカリの髪に触れようとするとヒカリは月下の手を振り返う。
「触らないで！」
月下は振り払われた手を見ながら少し淋しそうな表情をする。

『何でそんな顔するのよ私の事嫌いなんでしょ』

「何で私にかまうの？昨日は冷たく追い返したくせに！！私、月下が分からない優しいと思ったら今度は急に突き放すあの時の約束は嘘だったの！？」
「嘘じゃない！でもオレはお前をてっヒカリ！？」
ハァハァとヒカリは肩で息をし顔が火照り赤くなる体も何だかダルイそのまま月下の方へ倒れ込む。
「おい、大丈夫か！？ヒカリ確りしろ酷い熱じゃないか！」
火照った体に月下の肌が冷たく心地良いでもこの感じ何処かで？そうこの世界に来てすぐ感じたあの心地良さに似ているそのせいかほっとする。
「月下のばか・・・」
とヒカリは小さく呟くと眠気が襲って来て瞳を閉じる。
何で月下の前だと素直になれないんだろう。私こそ矛盾してる、もっと月下のこと知りたいのにもっと近づいてみたいそう思っているのにやること全て裏面にでる。このまま全ての出来事が夢ならいい、目が覚めれば終る夢・・・だって全てが現実離れしているしきっと夢なのだでも少し目を覚ますのが勿体ない気もする。

繋がり。

体がとてもふあふあし何だか空気にでもなったみたいだ。熱のせいだろうか？ここは見覚えがある家の庭だ！
昔ながらの日本の縁側、鯉が泳ぐ池の隣に私のお気に入りの桜の木が立っている。
花の季節は終わったらしく葉桜だった。夏前の花の香りを帯びた風が心地いい。
ヒカリは縁側に座ってみる、いつもの縁側が何故かとても懐かしい。ニャーニャーと喉を鳴らし猫がヒカリにじゃれついてきた。

『マリモ！？』

マリモは昔ヒカリが飼っていた猫だった。尻尾がフカフカでマリモみたいにまん丸なのでマリモと名づけたのだでももういないはず。マリモは何年も前に亡くなていた。

『ここはどこ？！マリモ、何処に行くの？』

マリモはヒカリから離れ居間の方へ行ってしまうヒカリもマリモを追って居間に行こうとした時だった。風が変り枝から枯葉が風に舞うあっという間に桜の木は枯れてしまったのだ。
ヒカリは不思議に思い庭を見渡すと枯れ木の前には少女が立っていた。少女がヒカリに気づき振り返る。見覚えがある顔にヒカリは驚く。

『私！？』

その瞬間何故か少女とヒカリの間から地面が崩れ落ちヒカリはのみ込まれた。とても大好きだった桜の木いつの間にか枯れていて父は寿命だろうと言っていた。

『私、何をしたの？桜の木を枯らしたのはわたし？どうして・・・』

考えても思い出せなかった。とても大事なことのように思うのにヒカリはまたそのまま深い眠りについた。

「うう～重い・・・」
ヒカリは寝苦しさを感じ目を覚ます。体が重い熱のせいだろうか？重い体を起こそうとした時だった額に衝撃が走る。
「いたぁ～何！？」
「キィキィ」

と獣が急に起き上がったヒカリに驚き叫びながらヒカリに襲いかかってくる。
「イャー」
とっさにヒカリは枕を投げつける。
獣が怯んだ隙に出口に勢いよくかけ込むとあるはずの物がない！！ヒカリがいた部屋は2階だったようで出口の向こうは外付けの階段だった。勢いよく飛び出したせいで止まることは困難だった。このまま下に落ちることを覚悟する。
私って何でこうドジなの落ちてばっかいる気がする！？
「ヒカリ！」
月下が持っていた物を放り出し慌てて階段を登ってくる。
「月下！」
間一髪月下はヒカリを受け止める。
「お前は！！どうしてこう不注意なんだ！」
「仕方ないでしょう獣が襲って来たんだから」
ヒカリは思わず月下と接近しあたふたする。

『近い！月下の顔が！？腕が腰に・・・』

「獣？」
「キィ」
と子ザルが月下の肩に乗るとジャレつく。
「こいつのことか？」
「そうそれ！」
月下は呆れながら・・・
「俺にはお前の方が獣に見える、それに重い！」
「なっなんですって！だったら早く離しなさいよ！」
とヒカリは月下の顔を手で押し返す。
「暴れるなよ！ここは建て付けが悪いって！！」
ガタンと木で出来たさくが外れ傾く二人は柵と共に外に放り出される。

『イャ～！やっぱり落ちるのね！！』

と覚悟した時だったヒカリの体が地面とは逆の方に引き寄せられる。
「お前死にたいのか！？」
とヒカリを支えながら月下が怒鳴る。
「だって！」
「だってじゃない、どうでもいいけど早く上がれよ俺ももう限界」

月下は何とか柱に捕まり自分の体重とヒカリを支えていた。
「どうやって！」
「しがみつけ俺に！早く」

『これ以上近づくの心臓が！？』

と少しヒカリは怯むも月下にしがみつくと月下はヒカリを引き上げる。

『どうしてなの！？どうしていつも…私は、知ってる月下が私のことを気にかけてくれていくことをでも知らないふりをする』

「ハァ、助かった怖かったよ！」
とヒカリは安堵し月下に寄り一層しがみつく、自分が月下にしがみついていることに気づきはっとする。
「ごっごめん」
「別に…」
と月下はそっけないが少し顔が赤い気がするのは気のせいだろうか。

『照れてるのかなぁ？ちょっと可愛いかも』

「所で月下ここはどこ？」
周りは緑に囲まれ古い二階建ての建物だけが建っていた。
「ここは学舎だ」
「学校？！」
「そうだ、俺は昔ここに通っていたんだ。城下町の学校では俺が黒龍だと気づかれると厄介だからな町外れのこの学校に通っていたんだ。他の卒業生は皆兵にでるか嫁いで俺しか残っていない、それでたまに来て手伝いをしてるんだ」
「そうなの」
人と関わることを嫌っていると思っていた月下の意外な一面を見てヒカリは関心する。
二人は並んで井戸までの道を一緒に歩く。

『月下とこうやってゆっくり話すの初めてかも・・・月下て冷たく見えるけど優しい所もあるのよね。私が関さんに捕まった時にも助けようとしてくれたしでも、何故助けようと思ったんだろうって！』

「私、噴水に落ちてびしょ濡れで！服！？月下！？」
とヒカリが急に慌て出し赤面する。
その様子を見て月下は

「ちっ違う！？俺じゃない安心しろ俺はお前みたいな獣興味はない」
「何ですって！！でも・・・もういいわ少し疲れた」
とヒカリは肩を落としため息をつく起きてこの方怒りぱなしだった。
「ほら」
と月下が丸く赤い林檎によく似た木の実をヒカリに渡す。
「ありがとう」
ヒカリは素直に受け取ると木の実をかじる。その身は甘くとても美味しかった。
「美味しい」
「そうだろうなぁ、お前3日も寝てたから」
「3日！嘘でしょ？」
「嘘じゃない、狼家には知らせてある今日迎えがくるはずだ」
月下は水が入った桶を軽々持ち上げる。
「月下も帰るのよね」
ヒカリはさらっと聞いてみる。

『何を聞いてるんだろう私、会話が続かない・・・』

「俺はまだ用事がある」
「そうなんだ・・・」

『なんだか残念なのは何故？自分の心が分からない』

「どうした？」
「別に！」
と可愛くない反応をしてしまう。突然月下の手がヒカリの額に触れる。
「大丈夫か？まだ熱があるんじゃ」
「なっなに！勝手に触らないでよ」
とヒカリは月下の手を払い退ける。
「悪かったよ」
と月下輪は桶を持って歩き出す。

『私のバカ！素直になれ』

「待って月下！その」
「何だよ」
と面倒臭そうにヒカリの方を振り返る。
「ありがとう！助けに来てくれて・・・私、嬉しかった。あの夜それが言いたかったの」
とヒカリはびっきりの笑顔を作ってみる少し顔が赤くなる素直になるってちょっと恥ずかしい。

「あぁ」
と月下も笑顔になる。
「私、狼家に戻ったら城に戻るね。私、頑張るから」
「ヒカリ・・・」
月下は何故か悲しそうな顔をする。
「どうしたの月下」
「頑張らなくていいお前は、元の世界に帰れ」
「何で！この世界には私が必要なんでしょ！？」
「俺はお前をこれ以上危険な目に合わせたくない、今大河に頼んで元の世界に帰れる方法がないか調べて貰っている」
「月下はそれでいいの！私が元の世界に返っても」
「あぁ、元々お前はここの住人じゃないだろ」
「月下は、私が嫌いなのね！だから・・・」
「ちっ違う！何でそうなるんだ！」
と月下は今まで見たことがないぐらい動揺する。
「何が違うのよ！」
「俺はお前がスッいや心配なんだ、お前は忘れているだろうけど俺は昔お前あったことがある。」
「どこで？」
「俺は幼い頃一年近く封印の間に閉じ込められていた事があるんだ」
「あんな所に一年も！」
ヒカリも一度入ったことがある封印の間とは城の地下牢の奥にある暗く冷たい牢獄のような所だった。
「彼処は、この世界にあってこの世界でない場所。俺は、黒龍をこの身に宿した時黒龍を押さえることが出来ずこの前の城で暴走仕掛けた時と似た状態になっていた」

封印の間、そこは暗く冷たい空間で床に描かれている巨大な魔法陣は黒龍の力を抑え込む嫌な臭いが漂い普通の人なら一時間と平常心を保てないだろう。
そんな空間に半年、意識は混濁し自分が自分で無くなっていくそんななかヒカリを見つけたんだ。
月下の意識は封印の間にあって封印の間には無かった。封印の間とはいろんな空間に繋がる通り道のような所、行きたい場所に行ける場所。
月下の意識は行く宛もなく世界を漂っていた。もう月下の居場所はセブンズドアには無かった。父と母は月下が黒龍を宿し暴走したさいに黒龍を抑え込もうとし亡くなっていた。希望も愛も無い世界…ただ膨大な世界が広がっている。
ヒカリがいる世界に降りようと言い出したの月下ではなく黒龍だった。一つの体に二つの心が混

在する。この時、黒龍の方に手動件があった。
黒龍は、地上に降りると一人の少女をずっと眺めていた。いや眺めることしか出来なかった。意識だけの存在の黒龍や月下には少女のいる世界に観賞することは出来ない。それに月下はただそこにいるだけで少女にも黒龍にも興味を持っていなかった。
だけど、少女を観ているうちに目が離せなくなっていた。泣いたり笑ったりコロコロ変わる表情、庭を元気に走り回る。何だかとても愛しいと思った。少女が笑うと心が踊る。少女を観ているだけで少し幸せな気持になれた。
だが、妬ましくもあった月下にとって羨ましく欲しくてもう手に入らないものを少女は持っていた。すぐ近くにいて何かあれば直ぐに手を差し出し守ってくれる家族・・・少女は、家族に愛され少女も家族を愛している。
複雑な気分だった。妬ましくて仕方がない一方で少女を愛しいとも思う。黒龍がどういう気持で少女を観ていたのか分からないがずっと観ていたずっと。
ある日を境に少女から笑顔が消えた。毎日泣いてばかりいる。母親が亡くなったのだ。父は仕事で家にいることは少なく少女はいつも家で一人父親の帰りを待っている。
月下は、少女の事を可哀想だとは思え無かった。自分だって同じなのだメソメソする少女を観ているとイライラした自分は悲しむ暇も無かった。悲しめるだけ少女は自分より幸せだと思ったのだ。もっと悲しめばいいと…
そんな時、黒龍が動いた意識だけの存在のはずの黒龍が少女に話し掛ける。

『待って！僕だって近づきたいのに・・・』

黒龍は月下の姿を借り少女の前に
「お母さんが居なくなっちゃたのどうしたらいいか解らないの・・・」
「僕の母上と一緒だ」
「もう泣かないで君には僕がいる。ずっと観ているからでも、もうここにはいられないだからこれを君に」
黒龍は少女に何かを手渡す。
「ありがとう」
「お兄ちゃんお名前は？」

『黒龍に名前なんてない僕の名前は！』

月下の意識と黒龍の意識がシンクロする。

『これは僕の体だ！！お前にやるもんか彼女に名前を言うのは僕だ！』

「僕の名前は・・・」
「ありがとう・・・のお兄ちゃん」

と少女は満面の笑顔をする。とても愛しくて自分が恥ずかしい。もっと観ていたいと思った。

ヒカリは月下の話を聞き終ると城で見た昔の自分を思いだす。

『同じだ何で忘れてしまったんだろう？』

「俺が今ここにいるのはヒカリのお陰だ。だがそのせいでお前を危険な目に合わせてしまっている、お前がこの世界に来ることになったのは俺のせいだ・・・」
「そんな事無いよ！ここにいるのは私の意識なの月下が何と言おうが私は帰らないわ」
とヒカリは月下に叫ぶ様に言う。

『まだ、帰るわけには行かない私はまだこの世界のために何もしていない』

「何かしたいの私が出来る事があるのなら、もうこの世界は私の世界なの分かって月下！」
はぁと月下はため息をつく。
「分かったよ、どっちにしても帰る方法が分からない事には帰れないしな」
と月下は呆れた顔で言う。
「でも、月下が私の事を愛らしいと思ってくれてたなんて以外だったなぁ」
とヒカリはニヤニヤしながら月下を見る。
「バカ！昔の話だろ今は鬱陶しくて図太女だと思ってるに決まってるだろ」
「何ですって酷い！」
とヒカリは月下に抗議する。
でも、何だか月下に近づけた気がしてヒカリは嬉しいかった。素直になるのは難しいけどたまには良いかもと思う。
「月下！」
とナミが駆けてくる。
「ナミどうした？」
ナミは、ヒカリより背が引くくショートヘアーが似合う活発的な印象の女性だった。
「も一探したはよ！急に居なくなっちゃうんだから」
と月下の腕にしがみつくとチラリとヒカリを見て
「あら、貴女もう具合は良いの？」
と声を掛ける。ヒカリは平常心を何とか保とうとするが顔がひきつる。
「大分いいみたいでお世話になりました。月下そのこ誰なの？私に紹介して下さる」
と言いながらもヒカリは笑顔が引きつる。月下は、空気をさっしたのか慌ててナミをヒカリに紹介する。
「おお、こいつはナミこの学校の校長の娘だ」
「月下とは幼なじみなのよろしくねヒカリ」

とナミは月下にしがみついたまま言う。
「よろしく」
より一層ヒカリの顔がひきつる。
そんな空気に耐え兼ねたのか月下はそそくさと来た道を帰る。ナミは月下にくっついたまま歩く。離れるつもりは無いらしい。
「何なのよあの子！」
とヒカリがイライラしながら二人の後を歩いていると。
「ヒカリ！やっと見つけた」
と誰かがヒカリを背後から抱き締める。聞き慣れた声がヒカリを安堵させる。
「ジン！！」
とヒカリは振り返ると会えた嬉しさの余りジンに抱き着く。
「良かった無事で・・・」
ジンの胸に顔を埋めジンが無事に帰って来たことを実感する。

『暖かいちゃんと生きてる』

「ヒカリの匂いだ安心する」
とジンもヒカリを優しく包み込む。
ジンは視線を感じ顔を上げると月下が二人を睨んでいた。
「おー睨んでる睨んでる」
「ジンどうしたの？」
「いや、ヒカリは相変わらず可愛いなぁと思って」
とヒカリを抱き締めヒカリの感触を確認する。
「えっ！あっ私ったら」
とヒカリは我に返り自分の大胆な行動にビックリし慌ててジンから離れると月下の方を見る。
月下は、少し不機嫌そうな顔をしているがナミは気づいていないようで相変わらず月下にベッタリだ。
「で何の用なんだバカ猫！！」
と月下がジンに尋ねる。
「相変わらず礼儀知らずのガキだな〜！まぁいい、大河から伝言だ至急城に来るようにだとよ」
「ヒカリもか？」
「あぁ、もう時間が無いらしい」
とジンは意味深な事を言う。月下の顔が曇る。
「ナミすまないな仕事だ。校舎の修理は今度な」
と月下は、くしゃくしゃとナミの頭をなでる。ナミは、少し悲しそうな顔をするが分かったと頷く。ヒカリ達はナミの父が手配した馬車に乗り城への道を急ぐ。ナミは、月下が馬車に乗り込む寸前まで月下から離れることは無く月下もそれを拒むことをしなかった。

「早く帰って来てね月下・・・」
「あぁ」
と月下は言葉少なく答えると馬車に乗り込む。そんな様子を見てジンはニヤニヤしながら
「この色男あのナミって子とはどういう関係何だ」
とヒカリが聞けないことをズバット聞く。
「ちょっとジン！」
と言いつつもヒカリも内心聞きたくて仕方がなかった。ナミは月下にとって、とても大切な存在であることは間違いなかった。人との関わりを嫌う月下があんなにも親しげに彼女に接している姿を見れば分かる。月下は、嫌がる様子無くすんなり話をする。
「あいつが言う様に幼なじみだよ、幼いころから同じ学校で学んだ仲だ。昔から仲が悪かったわけじゃないが、ナミが俺に執着するのは恐いんだ帰って来なくなるんじゃないかと戦争が続き貧困のため同級生達は皆兵士になり戦場に出て行くが帰って来ない、学校も戦争のため子供が集まらず休校それに加えナミの家は父親とあの広い校舎に二人暮らしだ淋しいんだよ、とても皆が居なくなり一人になる事を恐れている人が居なくなる怖さを知っているんだ」
と月下は淡々と話す。ゴクリとヒカリは唾を飲み込む。この世界は死に慣れ過ぎているのかもしれない仕方がないと諦めている戦争だからと。
「戦死は、この国では英雄だったな」
とジンが遠くの方を見て言う。
「せめてもの慰めだがな、だが戦かわなければこの国は滅び今より人々は苦しむ事になる」
月下の口調は淡々としていて他人のことを話しているような感じがした。
「矛盾しているよな神との契約て何なんだ？神は戦争をした人々に怒り俺たちに罰を与えたはずだ罪を償えと、でも人はまた罪を犯している・・・どちらにしろ早く戦争を終わらせないとな」
とジンが窓の外のを見ると町の人々が行き交う姿が見える。
「あぁ」
と月下も素直に賛同する。重たい空気を何とかしようとヒカリは口を開く。
「そう言えばジン、思ったより早く帰ってこれたのね」
とヒカリは2、3日前の出来事を思い出す。
「あぁ、また城へ着いたら話すよ今回城に戻るよう言われたのもそのせいなんだ」
「そうなの」
3人を乗せた馬車は城への道を急ぐ城に着いたらどんな事が待っているのかヒカリは少し不安になっていた。月下やジンの様子が変なことそして何より自分の胸の奥で何かが騒いでいるのを感じる。
ヒカリは馬車にゆられ城への道を急ぐ・・・。

ヒカリ達が城に着くとすぎさま兵士が龍美のいる部屋に案内する。城の中は、いつもどうりのようで何処かいつもより静まり返っているようにも感じる。いつもと何かが違っていた。ある部屋を境に兵士から女官に案内人が変わる。部屋の内装がどんどん派手になっていく品とはかけ離れた世界だった。ごちゃごちゃした内装のせいで目がチカチカする。
「この部屋の主人はどういう神経してるんだ！？」
とジンはげっそりした顔をする。ヒカリと月下は、龍美を知っているだけに苦笑いするしかなかった。
女官は扉の前までくると
「こちらが龍美様の寝室になります太下は中でお待ちです。お静かに願います太下は今体調がすぐれませんゆえ」
と言い一礼すると扉を開きヒカリ達を部屋に招き入れた。部屋の中は至ってシンプルな内装だったどれだけ中は凄い内装なのか期待していた3人は拍子抜けしてしまう。
「中は普通なんだな・・・」
とジンはキョトンとしている。中は広く龍美は屏風の奥にいるようだった。
「よー皆揃ってるな、ヒカリもう体調はいいのか？」
と大河が奥から顔を出すとヒカリの頭を乱暴に撫でる。
「大河！うん大丈夫心配かけてごめんね」
「ああ、元気そうで良かった」
と元気そうなヒカリを見て大河は安堵した表情を浮かべる。
「さぁこっちだ、太下がお待ちだ」
と屏風の奥に3人を招き入れる。
龍美はヒカリ達が入ってくるとゆっくりと身を起こした。龍美は白い着物を纏い肩掛けを掛け少し窶れた感じが艶っぽくいつもにも増して美しいかった。
「よく来たな、少し体調がすぐれないためこの格好で許せ」
そんな龍美を見てヒカリは自分が色々迷惑かけたせいなのではと申し訳なく思った。
「太下、お体がお悪いんですか？」
「心配ないただの過労だ、こう見えても年でね長い時間椅子に座るのも最近は辛い。お前がジンか幻影の遊牧民族の生き残りちゃんと逢うのは初めてだったな」
と龍美はジンを見る。
「あんたが王なのか、何百年も生きているて本当なのか？」
と龍美は自分の手元を見た。着物の袖から細くなった手首が見えるそれはもう時間が無いことを告げていた。
「あぁ、だがもう長くは無いようだ」
ジンの顔色が変わり何かイライラしている感じがする。
「世界の終末…。本当に来るんだな早くアリアを探さないと」
龍美がアリアの名前を聞き反応する。

「それが大神子の名か今何処に？」
ジンの表情が曇る。
「アリアはラオスに連れ拐われた。多分ラオスの中心都市にある城に捕らわれているんだと思う。オレが里に帰ると里は裳抜けのからだった。だが、神殿は残されていた残された幻影の民達が守ったんだオレ達の誇りを・・・」
ジンの体が震え怒りや悲しみを堪えているずっとずっと昔からジンは耐えてきたのだ・・・
「世界の終末て何なんだ？」
と壁側で黙って聞いていた月下が口を開く。月下が知らなかった事に龍美は驚く。
「話していないのか大河？」
「ハイ、時が来たらと思っていたのですが」
龍美は、少しの沈黙の後、口を開く。
「世界の終末とは神がこの世界に審判を下す時のことを言っているのだ。我人は、神の怒りに触れ罰を受ける事を受け入れたが、神はそれだけでは許して下さらなかった。ただ、人に有余を与えその間に罪を償うよう命じたのだ。神は人と融合したさい白龍と黒龍に分かれた人の心には闇と光が存在したからだ。白龍と黒龍とはこの世界の天秤、人の行いに反応し傾いていく白龍は世界の未来を黒龍は世界の終わりを表し、そして今天秤は黒龍の方へ傾いている人の心は戦争で病み闇が夜な夜な町を徘徊する今世界は闇にのみ込まれつつあるのだ。そして、私に宿る白龍の力も尽きようとしている天秤は滅びへと傾いているのは明白な事実」
「そっそんなぁ！何か助かる方法は無いの？！」
とヒカリはベッドに両手を付き龍美に迫る。月下とジンも黙って聞いているが表情は暗い。
「天秤を戻せばいいだ」
とジンが突然口を開く。
「どうやって？」
とヒカリがすかさず聞くと龍美が答える。
「白龍は、居なくなっただけで消えた訳じゃない白龍と黒龍は対の存在一方が消えればもう一方も消える。月下の中の黒龍は消えていない白龍を呼び戻せれば世界は安定する。その為に大神子の力が必要なのだ。大神子は神と意志疎通するための仲介者が出来る唯一の存在。其処でお前達に大神子を探し出して欲しいのだそして白龍をまたこの地に・・・」
「ちょっとまて、あんたの中に白龍がいるんじゃないのか？」
とジンが言う。ヒカリも疑問に思っていた、月下の中には黒龍がいるのに同じ神の器である龍美の中に白龍がいないのはちょっとおかしい気がした。龍美はゆっくりと語りだす。
「もともと神は人の中に納まりきるものではなかった黒龍が器を変えるのは人が黒龍の力に耐えることが出来ないからだ、対である白龍も同じ力を持っているが白龍は器を変えることなく今でも私の中にいる小さくなってしまったが。人は、神の願いに反して滅びの道に進んでいき時がたつにつれ世界は病んでいく、いつの日か気づくと私の中の白龍は少しづつ小さくなっていた皮肉にもそのお陰で私はまだ生きていられるのだ、だが白龍の力が無いと私は生きられない私は長く生き過ぎた寿命はとうに過ぎている、白龍も器がなければ存在することができないだから新しい

器が見つかるまで私を生かしているのだろう。白龍は探しているのかも知れない私が壊れる前に新しい器を」
「太下…新しい器が見つかったらあなたは・・・」
と言いかけヒカリは黙る。聞いたところでどうなるわけでもない変わらない何も・・・
「事情は分かったがあんた達の力をオレは借りるつもりは無い、これは俺たち幻影の民の問題だ手を出さないでくれそれを言いたくてここに来た」
とジンが突然言い出す。
「ジン！ちょっと待ってよ、お前の気持ちは分かるがこれは世界の問題だ」
と大河が説得しようとするがジンは話を聞こうとせず扉の方に歩いて行く。
「ジン！待って話を聞いて！！」
とヒカリがジンを止めようと声を掛けるとジンの足が止まるが振り返ることはしない。
「ヒカリすまない今回だけは手を出さないでくれ、アリアはオレが助けないといけないんだ命を賭けた民のためにも」
「いやよ！これはジンだけの問題じゃないの私たちの問題なのそれにどうやってラオスの城の中に入ろうて言うの？貴方は、あの国では罪人なのよ！！」
ジンは、ヒカリと会ってすぐユーリスとラオスの国境を守るラオスの城で上官の首を刎ねた事でラオスから追われる身になっていた。
「だが、ヒカリや月下だって同じことだろう！」
ヒカリはジンの言葉を聞いても怯むことなく逆に自信に満ちた表情をしている。
「私に考えがあるはまかせて、安全かつ間違いなくラオスの城に入れる方法がやっと私が役に立つ時が来たのよ！」
「お前なぁ大丈夫なんだろうなぁ」
と月下は不安そうな顔をする他の者も似たよな反応だった。
「まぁ、話を聞こうじゃないかそれからでも遅く無いだろそれに勢いに任せて突っ走るのはジンの悪い癖だ。落ち着けジン」
と大河がジンを宥めようとする。
「それはそうだが・・・」
とジンは少しは落ち着きを取り戻した様子だったが納得行かないといった顔をしていた。そんなジンを見て月下が。
「落ち着けよ慌てると上手く行くこともいかなくなるぞバカ猫」
それは以前ジンがヒカリが敵に捕らわれたさい、暴走し突っ走ろうとしていた月下に言った言葉だった。ジンは少しの沈黙の後
「分かったよ話を聞こうオレが悪かったつい身内の事になると周りが見えなくなるのは自分でも分かっている。だが、今回の事は自分が原因だけに抑えられなかったアリアを妹を早く助けたくてすまない」
トンと大河がジンの肩を叩く。
「分かっている」
と皆の気持を代弁し静にジンに告げる。

「良い仲間を持ったなジン」
と龍美が言うとジンは照れくさそうに笑いながらハイと答えた。
「では聞こうヒカリの作戦とやらを」

ヒカリの話を聞き終えると皆、黙り込むが月下だけは違っていた。
「そんな危険なことをお前にさせられるか！！考えるまでもない」
ヒカリの作戦とは、ヒカリを人質にジンがラオスに戻ると言うものだった。元々ジンはラオスの副官それにラオ
スはヒカリを手に入れたいと思っているのは以前あった誘拐事件で明らかだた。ジンがヒカリというを手土産を
持って帰る事でラオスは二人の入国を許すことは間違いないだろう。
「そうだな、ヒカリを危険な場所に連れて行く事は私も反対だが魅力的な作戦ではある」
と龍美は答える。
「どういう意味だ！」
と月下が龍美に噛みつく、龍美は狼狽えることなく冷静に答える。
「賛同は出来無いにせよ一つの方法として魅力的だと言っているのだ。大神子は神との仲介者神で意志疎通出来
るのはヒカリなのだヒカリがラオスに潜り込み大神子に会う方うが大神子を助け出すより作戦の成功確率は高い
。それに、我が国ユーリスに近隣諸国が攻めてこようとしている動きがあるユーリスにいてもヒカリの安全を保
証出来ない」
思いもしなかった事実が告げられるユーリスは今や一番危険場所になっていたのだ。
「何故、今ユーリスに皆攻めてくるんだ？水を求めてラオスが攻めて来るのは分かるだが、申し訳ないが長い戦
争で衰退した水しかない国に他の近隣諸国が攻めてくる理由が無い」
とジンが言う。
ユーリスは自然豊かな国だが地下資源は乏しく水しかない国で、元々その水を利用し野菜や果物を作りそれを輸
出することで経済を支えてきた。だが、長い戦争で輸出も途絶え人手もない経済は衰退する一方だった。
「今、世界は闇に喰われているのだ。神に守られた我が国ユーリスに闇が侵入して来ることは無いが近隣諸国で
は被害が拡大している。近隣諸国は、我が国ユーリスが闇を操っていると考えているようだ皆の恐怖や怒りがユ
ーリスに向かっているもう話をしても耳を傾けることは無いだろうそれだけ世界は闇に怯えているのだ」

龍美の話を聞き皆、黙ってしまう。世界が滅ぶ事を恐れ足掻いている。でも、人は愚かで的外れな事をする自分
達が悪いわけではない彼奴が悪いのだと現実を見ようとしない。世界は暴走しかけていた。
「呆れた話だな」
と月下がため息混じりに言う。
「だが、どちらにしろ俺はヒカリをラオスに行かせるのは反対だ。彼処には、怪しい術を使う赤毛の男がいる彼
奴は危険だ」
「そうだな、オレもヒカリを危険場所に連れて行く事は出来ない」
とジンもヒカリをラオスに連れて行く事に反対のようだった。トントンと扉を叩き女官が入ってくる。
「失礼致します。太下、診察のお時間です皆様も、夕食の用意が整っておりますが」
と言うと一礼する。
「もうそんな時間か、話はまた明日にしよう。太下も休んで頂かないと」
と大河が龍美を気遣う皆、部屋を後にする。
ヒカリは食事をとる気になれず自室に籠っていた。この世界はどうなってしまうのだろうとそればかり考えてい
た。やっと自分の役割を知りこの世界のために役に立てると思ったのに世界はヒカリが思っていたより滅びに近
づきつつある一刻も早く大神子に会い白龍を探さないとでも、月下はヒカリがラオスに行く事を許さないだろう
。何度考えても結論は同じだった。もんもんとした気持でヒカリはベッドに転がっていた。そんな時部屋の扉を
誰かが叩く。
「夜分に失礼致します」
と懐かしい声が聞こえてきた。リンが部屋に入ってくる隣には琢磨が寄り添うように立っていた
。
「リン！」
ヒカリはリンの姿を見るや飛び起きると駆け寄りリンの手を取る。
「ごめんねリン心配かけて」
リンの事は大河から聞いて知っていた。ヒカリが居なくなった後、体調を崩し部屋から出ることが出来なくなっ
ていると、明日にでも会いに行こうと思っていたのだ。
「良かった本当に良かった」
とリンは泣き崩れる。ヒカリはそんなリンを抱き締める。ただただ感謝しかなかった。ありがとうと・・・こんな私に
こんなにも心配してくれる人達、本当に温かい場所。元の世界で感じる事が出来なかったものが

この世界にはあ
る。私はユーリスが好き無くしたくない自分の居場所。だから私は・・・。

ジンは、荷物を抱え城の門の前にいた。後ろを振り返り城を見上げる。
「皆には悪いがもう待てない、すまない」
と言うと城から出て行く、そこにはヒカリがジンを待っていた。
「ひっヒカリ！どうして」
とジンは驚く。
「私を連れてってジン」
「バカ言うな月下が賛成するはずがないだろう。月下だけじゃないオレも反対だ！！」
「私は、一人でも行くわもう決めたの、誰が反対したとしても行く！私の役目だから行かないと私は一生懸後悔す
る」
ヒカリの意志が堅いことが伝わってくる。ジンには有難い話だった正直、警備が厳しいラオスに真っ正面から
入るのは難しい。それにジンは罪人捕まればアリアを探すことはより一層難しくなる。だがヒカリがいれば別だ
。ジンは少し考えた後
「分かった、でも無茶はするなよ」
とジンは渋々承諾した。二人はユーリスを出てラオスに向かった。

夜が明けた城では、大河がジンがいないのに気づきヒカリの部屋に向かう。ヒカリの部屋から月下が出てくる。
「月下ヒカリは！？」
「もぬけの殻だ、ヒカリを早く連れ戻さないと！！」
と走り出そうとする月下を大河が止める。
「離せ大河！」
「落ち着け月下、もう間に合わない城を出たのは深夜だろう時間がたちすぎている。ジンと一緒ならもうユーリ
スの領土を出てラオスの国境を越えている。お前が国境を越えればそれこそ戦争になるお前のことはラオスにも
う知られているんだからな、それに近隣諸国が攻めてきた時にお前がいないとユーリスを守りきることは不可能
だ。お前にユーリスを捨てることは出来ないだろう」
月下は拳を握りしめ黙り込む。
「側にいればよかったヒカリ・・・」
「月下、すまない」

と大河、本当なら行かせてやりたいでもそれはユーリスの滅亡を意味する。
国民を犠牲には出来ない。そして、それは月下も同じ気持だった。もうジンとヒカリに任せるしか道は無い、無事戻ることを祈ることしか出来なかった。

あとがき。

お久しぶりです。

４ヶ月ぶりの新刊です。物語りもクライマックスに近づきつつあります。
後、２回ぐらいの更新になりそうです。お付き合い頂けると嬉しいです。

まだまだ、イラストリクエスト・感想お待ちしております。

モカ

月のヒカリ Ⅴ

http://p.booklog.jp/book/15995

著者 : モカ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/retoropot/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/15995

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/15995